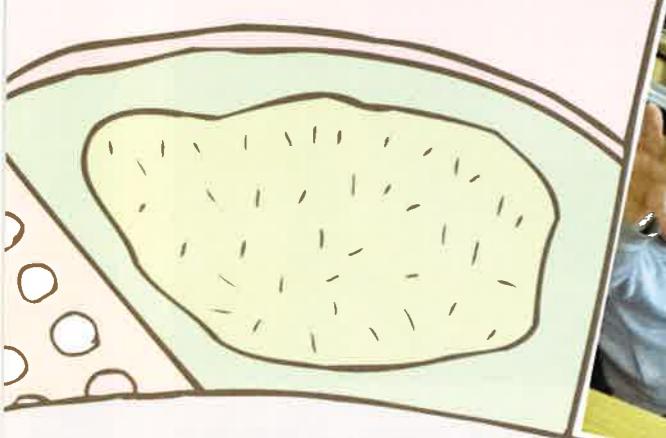


豊田市障がい者 総合支援センター

平成28年度



平成28年度
活動報告・研究報告「結」

平成30年3月発行

豊田市障がい者総合支援センター

<http://www.fukushijigyodan.toyota.aichi.jp/>

社会福祉法人 豊田市福祉事業団

目次

豊田市障がい者総合支援センター「結 平成28年度」を作成いたしました。

平成17年度から、総合支援センターの各施設がその年度に行った取組みの一つを取り上げ、紹介させていただきました「紀要」を、平成24年度版からは手に取っていただきやすい形に一新いたしました。また、豊田市福祉事業団のホームページにも掲載していく予定です。多くの方にご覧いただき、少しでも皆様のお役に立つことができれば幸いです。

私たちとは誰かとつながって生きてています。

ひとりで悲しんでいるとき

誰かに話を聞いてもらえたなら、少し楽になるかもしれない

うれしいことがあったとき

誰かに「よかったです」といってもらえたなら、もっとうれしくなるかもしれない

ひとりではできないことも

誰かと力を合わせれば、できるかもしれない

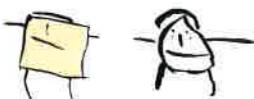
利用者の方と地域の方々が結ばれることで、お互いがハッピーになれたらしいなと考えながら、私たちも毎日の支援を行っています。

私たちの支援を地域の方々に少しでも知ってもらいたい。

その思いを「結」という言葉にのせて発行いたします。

(表紙の題字は、第二ひまわり 鈴木貴士さん)

豊田市障がい者 総合支援センター



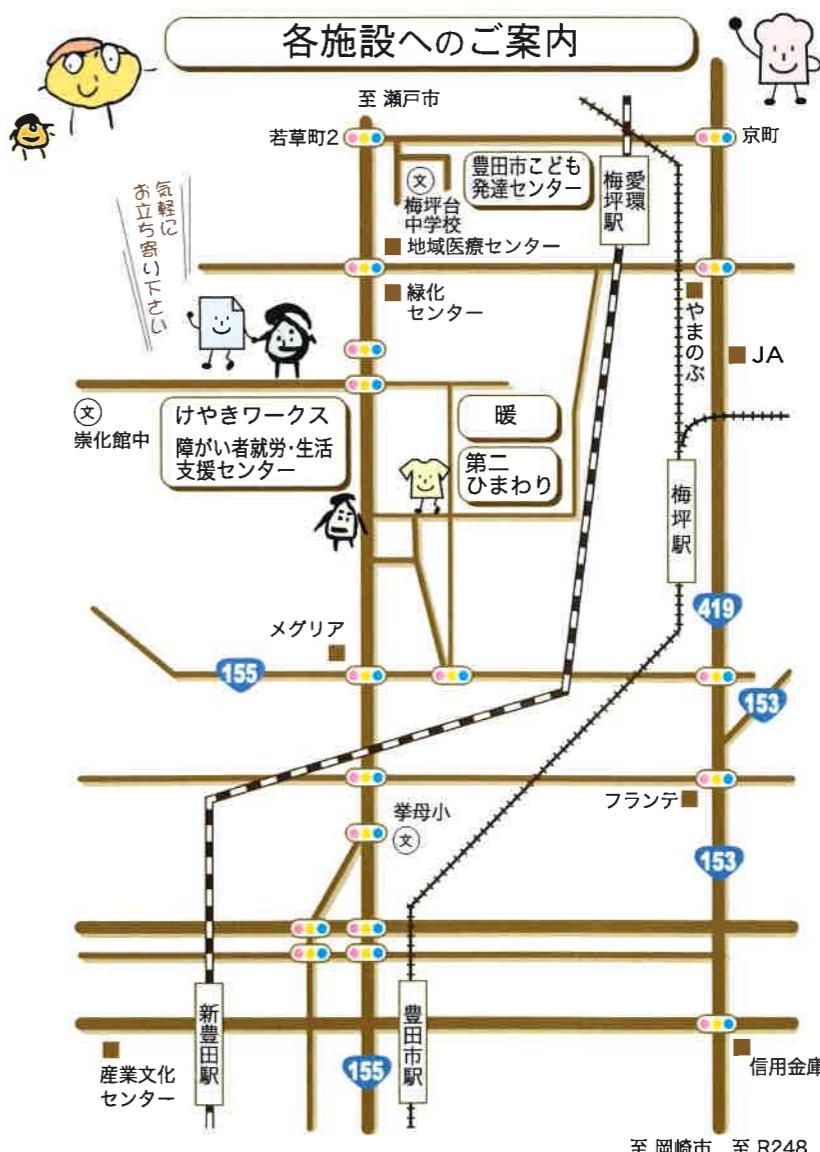
豊田市障がい者総合支援センターとは、障がいのある方の自立及び社会参加を支援し、豊かな地域生活の実現を図るため、豊田市が設置した施設です。「障がい者就労・生活支援センター」「けやきワークス」「第二ひまわり」「暖」の4部門で構成しています。

豊田市から指定管理者の指定を受けた豊田市福祉事業団が、障がい者総合支援法に規定する障がい福祉サービス事業と、豊田市から委託された就労生活支援事業などを行っています。

けやきワークス 1
工賃向上計画
～加茂丘高校との共同商品開発～

暖・第二ひまわり 3
なつまつり
～地域と作るお祭り～

障がい者就労・生活支援センター 7
障がい者福祉従事者研修



工賃向上計画 ～加茂丘高校との共同商品開発～

けやきワークスでは就労継続支援B型の事業を行っています。事業で得た収入を利用者に工賃として支払い、利用者は工賃を生活費として使用したり、お小遣いとして好きな物を購入したりしています。工賃が増えると利用者の生活の質は上がります。生活のため、仕事に対するやりがいのため、収入を増やし利用者の工賃を上げる計画を立てています。

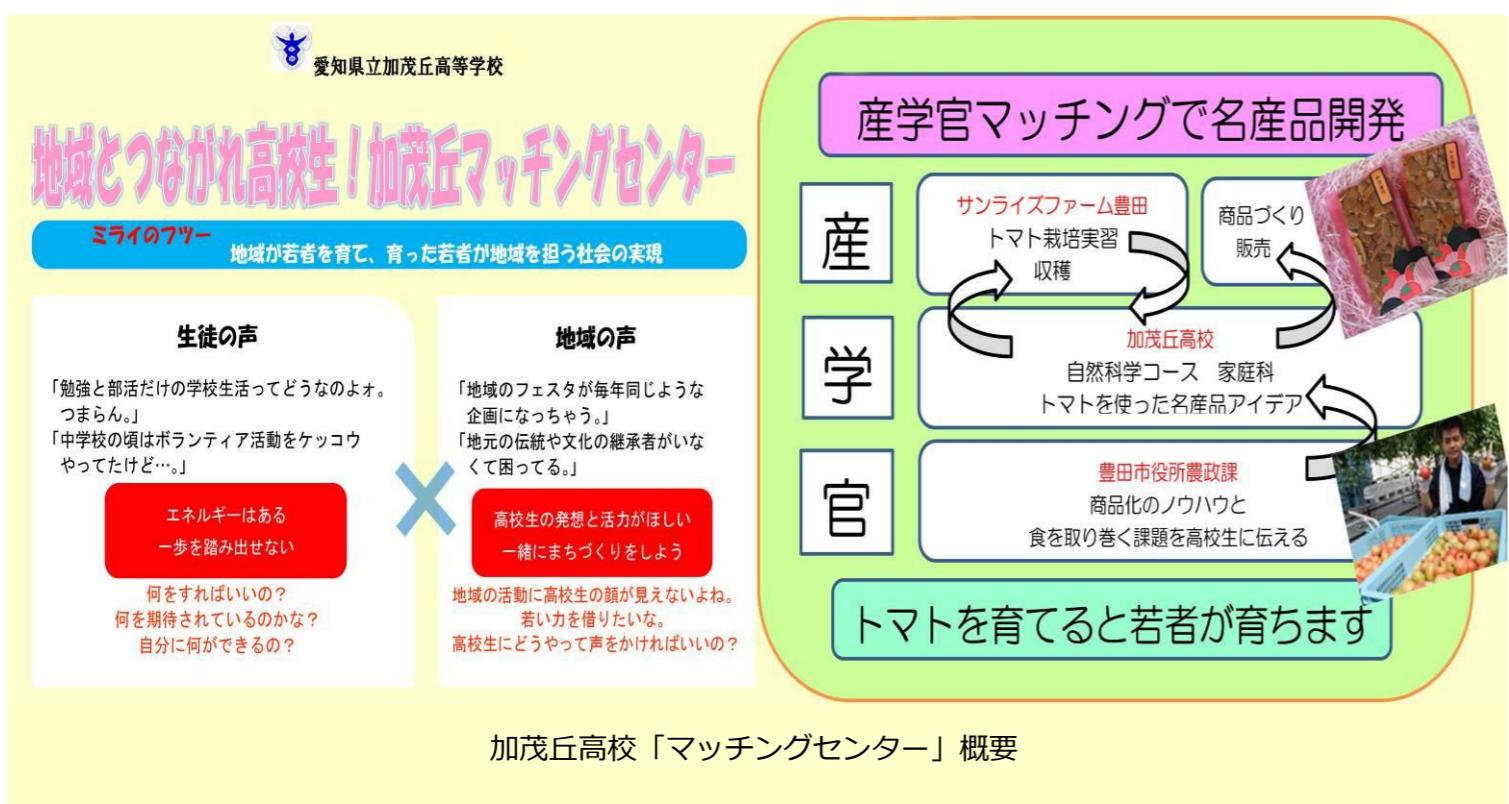
事業の一部である喫茶店とパン工房では、事業収入を増やすため日々新しい商品を開発しています。今回はその中から、加茂丘高校と共同商品開発を行った「ピリ辛トマトスープ」、「トマトラスク」について紹介をします。

1 共同商品開発のきっかけ

商品開発は日々行っていますが、今回のように他機関と一緒に商品開発を行うことは2回目です。きっかけは豊田市役所農政課から、加茂丘高校が行っている「加茂丘マッチングセンター」活動への協力依頼でした。

この活動は生徒と地域のニーズをつなぎ、お互いの悩みや企画をマッチングさせる地域活性化を目的とした活動です。

今回は藤岡地域で栽培しているトマトを使用して、食品開発をしたいという活動内容でした。食品開発と商品販売が一緒にできる場所として、けやきワークスが候補に挙がりました。地域活性化への貢献と収入増のため、実現に向けて何度も打ち合わせを重ねました。



2 商品開発まで

今回の活動は生徒がトマトを使用したスープのレシピを考案し、レシピをもとにけやきワークスで調理・販売を行うという内容でした。

生徒が6グループに分かれてスープ開発を行い、市役所担当者、学校教諭、けやきワークス担当者が集まり試食・選考会を行いました。全てのスープの味も見た目も素晴らしく、選考は困難を極めましたが、その中から「ピリ辛トマトスープ」が選ばされました。けやきワークスの運営方針である“利用者が主役”という点において、調理の際に利用者がスープ作りに関わる工程が多いことが選出要因となりました。また、けやきワークスの客層に喜ばれそうな味という視点も考慮しました。

その後、けやきワークスでもレシピに手を加え、「パンネ」を「押し麦」に変え、オリジナリティを出し販売を開始しました。また、スープと並行して「トマトラスク」の開発にも取り掛かりました。こちらも生徒発案のレシピのもと作成しました。作成する際には生徒がけやきワークスに来所し、一緒に作成しました。トマトラスクはけやきワークスだけでなく、地域の方たちに知りていただけるよう学校主催のお祭りでも販売されました。



トマトラスクを調理している様子
(けやきワークスにて)



ピリ辛トマトスープ
(写真はスープセット)

3 共同開発を行ってみて

商売は10年間同じ内容を続けていたら、お客さんは飽きて来客は減少し、店舗は閉店してしまうと聞きます。その為けやきワークスでも日々新しい商品や季節商品を開発し、顧客増加に努めています。今回は、我々とは違う視点で商品開発ができ、とても良い機会でした。また地域の活性化、加茂丘高校生徒の希望も同時に達成できました。

今回開発した「ピリ辛トマトスープ」は、喫茶店で瞬く間に人気商品となり、相乗効果でスープ各種の売上も増えました。スープの人気からスープセット（お好きなスープ、塩パン、ミニポテトサラダ、ドリンクのセットで¥680）をメニューに加えたところ、こちらも大人気メニューになりました。

商品開発を行い、利用者の作業工程や売上も増え、一緒に喜ぶことができました。しかし人気商品でも、長く続けていたらいつかは人気が下降していきます。その時に更に新しい試みを行い、加茂丘高校生徒と共同開発した「ピリ辛トマトスープ」を利用した新しいメニューを開発していきたいと思います。そして、利用者が満足できる生活が少しでも達成できるよう支援していきます。



『なつまつり』

~地域と作るお祭り~

なつまつりは、毎年8月上旬に、暖と第二ひまわりが共同で開催しているお祭りです。毎年、地域の子どもたちを中心に150名ほどの来場者でぎわいます。

なつまつりで、私たちが最も大切にしていることは、「地域とのつながり」です。地域の小学生やボランティアの方に協力してもらい、いっしょに楽しめるお祭りを作っていました。

なつまつりの移り変わり

なつまつりの始まりは平成17年までさかのぼります。当初は地域の子どもたちを対象とした「夏休み工作教室」という名前で、暖や第二ひまわりで行っている創作活動を利用者といっしょに体験するイベントでした。

今の「なつまつり」の形になったのは平成18年で、最初は来場者が80～90名くらいの小規模なお祭りでした。平成26年に24時間テレビの募金活動が来たり、ケーブルテレビの取材を受けたりしたこと、徐々に知名度が上がってきました。

平成27年は来場者が180名近くとなり、子どもたちだけでなく地域全体で楽しむお祭りに変わっていきました。



平成18年 なつまつりの様子



平成28年のなつまつりビラ

暖・第二ひまわりの催し物

地域の子どもたちに『楽しかった』『また来たい！』と思ってもらえるような企画を利用者と共に考えています。ゲームや体験活動を通して、たくさんの交流と笑顔が生まれます。

だんのちいさなお店

暖・第二ひまわりの利用者が作っているフェルト作品、パン生地作品、紙すき作品、さをり織り、野菜や陶芸サークルの作品を暖の利用者が店員になり販売します。



体験コーナー

暖では、利用者が普段行っているパン生地創作、フェルト創作がテーマです。クイズを出したり、利用者が見本を見せながらいっしょに作ったりします。

第二ひまわりでは、子どもたちでも簡単にできる工作や実験などを考えて、利用者と参加者がいっしょに楽しめるよう、工夫しています。



暖・第一ひまわり

生活介護

ゲームコーナー

ゲームコーナーは、普段利用者が楽しんでいるゲームをさらに盛り上がるようにアレンジを加えています。

第二ひまわりでは、利用者と参加者が対決をして、楽しむ形のゲームもあります。



小学生ボランティアについて

地域の小学生がボランティアとして活躍しています。主に、各施設で交流している小学生が、利用者といっしょに、ゲームや創作のサポート、受付などを行っています。

例年、20名以上の小学生がボランティアとして参加して、なつまつりを盛り上げてくれます。



開催年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
ボランティアの数	25名	62名	23名	21名	38名

表1：過去5年の小学生ボランティア数

小学生との交流について

なつまつりに地域の小学生を呼ぶことにより、利用者との交流が生まれます。

最初は、利用者と過ごすことに抵抗や緊張を感じる小学生が多いです。しかし、職員が仲立ちとなっていっしょに過ごすことで、笑顔やコミュニケーションが増え打解けていきます。

このような交流を通じ、地域の方々に障がいのある方への理解や施設への理解が進んでほしいと思っています。



今後のなつまつりについて

なつまつりは、地域の方と交流する大切な機会です。

地域の方の障がい理解が深まると、利用者の社会参加が促され、利用者の活躍の場が増えることにつながります。

障がいの方と地域の方が、お互いに理解しあえるように、今後も交流する機会を作っていくたいと思います。



障がい者福祉従事者研修

1 研修の目的

障がい者福祉従事者研修は、豊田市内にある就労系の事業所や日中活動サービス事業所などの職員を対象に行う研修です。毎年、障がい者就労・生活支援センター主催で大学教授などを講師にお招きし、グループワークなどの実践的な内容の研修を行っています。

今年度は「発達障がいのライフデザイン支援」をテーマに、正しい知識を持ち、誤解されやすいご本人たちの特性や困りごとを理解してもらうことで、発達障がいの方が暮らしやすい地域を考えることを目的とし、研修を行いました。



障がい者福祉従事者研修の様子

2 研修の概要

日 時 平成 28 年 10 月 4 日 (火) 14 時 00 分～16 時 00 分

場 所 障がい者就労・生活支援センター

講 師 愛知教育大学大学院 准教授 三谷 聖也 氏

テマ 「発達障がいのライフデザイン支援」～疑似体験ワークを通して当事者の側から考える～

来場者数 約 40 名

過去 5 年間の研修テーマと講師

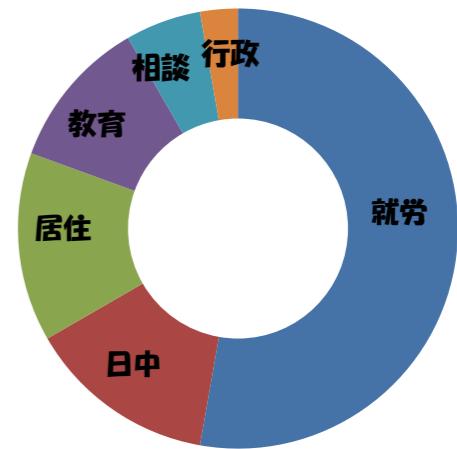
年度	テーマ	講師
平成 24 年度	対人援助の基本姿勢 ～聴くことの大切さ～	日本福祉大学 中央福祉専門学校 校長 長岩 嘉文 氏
平成 25 年度	人が人を支えるために必要なこと	社会福祉法人 あさみどりの会 丹下 靖 氏
平成 26 年度	個人を尊重する相談とは	日本福祉大学 健康科学部 准教授 水谷 なおみ 氏
平成 27 年度	誰もが暮らしやすい地域づくりのために ～発達障がいのある方のサポートを考える～	豊田市福祉事業団 理事長 高橋 健 氏
平成 28 年度	発達障がいのライフデザイン支援 ～疑似体験ワークを通して当事者の 側から考える～	愛知教育大学大学院 准教授 三谷 聖也 氏

3 参加者の属性

障がい者福祉従事者研修は、毎年 20～40 名の方が参加しています。(平成 27 年度のみ豊田市福祉会館ホールで開催したため、約 280 名が参加) 就労系の施設をはじめ、日中支援や教育や相談関係施設の職員など、様々な施設の職員が参加しています。

平成 28 年度参加業種

就労系	19 名
日中活動系	5 名
居住系	5 名
教育関係	4 名
相談支援	2 名
行政関係	1 名



4 参加者の意見・感想

- ・今回の研修は、発達障がいを持つ親や発達障がいを地域の方に伝えるときに、とても役に立つと思います。(30 代・男性)
- ・あいまいなメッセージを分かりやすくするのは、「見える化」することによって相手に伝わりやすいということを知り、今後の支援に役立てていきたいと思った。(20 代・男性)
- ・当事者疑似体験は初めてだった。実際にやってみると、焦り、イライラ、投げ出しがなる気持ちなどを実感することができた。当事者のストレスは何倍も大きいのではないかと思った。(40 代・女性)
- ・ほめても、はげましても負担になってしまうこと。体験しなければ分からなかった。イメージが理解しやすかった。言葉よりもこれは健常者も同じではないかと感じた。(40 代・男性)
- ・3つのワークを通じて、発達特性について分かりやすく学ぶことができて楽しかった。「合理的配慮」という言葉だけ聞くと難しいことのように感じますが、発達障がいについてきちんと理解し、ちょっとした工夫をすることで発達障がいのある方も生活しやすくなるのだと分かりました。日々の支援に活かしていきたい。(20 代・女)

豊田市内にある支援機関・支援者が、将来を見通して連携することとスキルアップの必要性を、今後も啓発していきたいと考えています。